# 巻頭言　基礎理論を現場で再学習できないか

分野が何であれ、プロになるには長期間の教育訓練が必要である。米国では最近、何らかの分野で成功するには一万時間の計画的訓練（deliberate practice）が必要だとする「一万時間の法則（10000-hour rule）」が話題になっている。勿論、漫然とではなく、目的意識を失わずに強い意志力（grit）をもって努力を継続した場合の話である。普通の社会人の勤務時間で換算すれば6年位に相当するだろうか。昔は一人前の航空管制官になるのに10年は掛かると云われていたものだが、それよりは短いことになる。芸術やスポーツの世界では幼少からの英才教育が必要だとする考え方が強い。能の古典的教科書「風姿花伝」では数え6歳から稽古を始めるのが良いとしているし、音楽やスポーツの世界大会で優勝した若者の経歴を見ると3歳から習い始めた等と云う人が少なくない。

昔の商家では「学校頭は要らない」と云ったものだそうだ。高等教育を受けた人は理屈ばかりで商売の現場では役に立たない、読み書き算盤、簿記だけ学んだら後は現場で経験を積んだ方が良い、と云う発想だったからだ。しかし商売の規模が拡大し、複雑で専門的になると実学だけの番頭さんや小僧さんの手には負えなくなった。昨今の商業界ではマーケティングやOR（Operations Research）等の高度な理論を駆使する学校頭の人達が大活躍している。即戦力化を目指してすぐに役立つ知識とスキルだけに限った教育は、定型業務を細分化した現場では確かに有効だ。しかし、例外的事態や環境変化への対応力が育たないし、全体的な視点が持てないので新しい企画や開発等も出来なくなるのだ。

逆に基礎に重点を置いた教育を行っている例がある。欧州の伝統的古典学校では古代ギリシャ語やラテン語、修辞学など実用とは程遠い難解な科目をじっくり教えるのだそうだ。その結果、あらゆる学問の基礎となる高い学習能力と論理的思考が身に付くので、その後の専門教育への進路は文系でも理系でもOKで、履修期間も短くて済むそうだ。急がば回れである。中学校で2年間英語を教えたクラスと、一年目にエスペラント語（理論的に開発され文法に例外のないヨーロッパ系の人造言語）、二年目に英語を教えたクラスを比較すると、後者の方が英語の成績が良いと云う実験結果と似ているかも知れない。

近年、管制官の不足を補う為の育成が喫緊の課題となっている。現場に赴任したら即戦力になる事を目指す合理的且つ実務的な教育訓練で、実務に必要な内容を厳選し、高度なシミュレータの活用等で効率化を図っている。しかし、レギュレーターとプロバイダーとの分離や技術進歩に伴う新しいシステムや運航方式等、管制集団として理論的な対応が必要な事項は益々増えている。一部の希望者だけでも補習が出来る仕組みを作り、せめて研究所の研究者等と共同研究が出来る位の理論力は確保したいものだ。現行の航空管制官の育成カリキュラムを大きく変更するのは困難だが、経験と理論とは車の両輪の様なもので互いに補い合うので、実務経験を積んだ後の再学習は興味深く効果的でもある。インターネットを通じた通信教育等、配属後も場所や時間の制約なしで基礎理論をじっくり再学習出来る仕組みなら費用も少なくて済み、実現性があるのではないだろうか。